

◆障害学生の修学支援◆

第一〇回 支援コーディネーター

筑波技術大学助教 石田久之

二足の草鞋

前号で、正規職員が支援担当として専門的になってくると書きましたが、完全に専門化しているわけではありません。従前どおり担当している教務係や学生係の職務も当然行っています。併せて、障害学生の話の聞いたり、相談に乗ったりということもするわけですから、その負担は大きく、二足の草鞋はかなり厳しいというお話です。

さて、最初は少数の学生を対象として支援業務が始まるわけですが、次のような理由があると、この数は増えていきます。一つは、障害のある生徒を大学が受け入れたことを先輩や他の障害者が知り、入学を希望する場合です。入学を許可した大学には続けて、障害学生が受験・入学するというをよく聞きますが、あの大学に入れば、安心して学生生活を送れ、やりたいことができるようなので、自分も受験してみようと思えるのではないのでしょうか。もう

一つは、今まで黙って一人で頑張っていたけれど、そういう支援があるのなら、相談してみようかという障害を持つ学生が現われてくる場合です。

このように、支援する学生の数が増え、また障害の種類・程度も多岐にわたるようになると、他の業務を行いながら支援業務もというのは、相当無理があるようです。そこで、「いくつかの大学」では、このような事態に対応して、障害学生修学支援コーディネーター（以下、コーディネーターと略します）を配置しています。

いくつかの大学

「いくつかの大学」と書きました。残念ながら、我が国で、コーディネーターを配置している大学は、数%程度です。支援業務の兼務から、専門の担当者へという展開は必要不可欠なことだと私は思うのですが、各大学の経営理念や教育に対する考え方、実際の経費などの面から、そう簡単に、配置が進んでいくということにはなりません。実は、偉そうに、かく言う私も同様で、全学生数の中で多分1%にも満たない障害学生の支援のために専門の職員を配置していることを初めてうかがった時は、すごく驚きました。

それでは、コーディネーターの業務についてみてみましょう。非常に多くの業務があり、年間の支援業務計画の策

定や予算の算出まで任されている場合もありますが、ここでは大学間で共通する業務について見ていきます。

障害学生との相談・話し相手

一つは、障害学生との支援内容の打合せや各種相談です。支援は障害によって一律に決まっているわけではありません。どのような支援を提供するかということなどを障害学生と細かく打合せます。同じ障害でも、ある学生は、この支援は必要ないと言い、ある学生はどうしても必要だと言います。それらを他の様々な要因を考慮しながら、効率的に、必要とする学生に適切に提供するための細かな打合せです。機械的な対応は最も避けなければなりません。

これは更に発展して、話し相手としての存在という業務にもなります。あそこに行けば、あの人に言えば、何とかしてくれる、あるいは、話を聞いてくれるだけでも安心できる、という存在は、一人で考え込んでしまいがちな障害学生にとって、とても大きなものです。勿論、支援内容にとどまらず、友達、恋愛、人生、いろいろな話題がでます。

支援学生への支援

通常、コーディネーターは個別の支援を行いません。個別の支援とは、手話通訳、ノートテイク、点訳などです。

多くの大学で、これらの実際の支援を行うのは、後述しますが、主に障害学生の周りにいる健常学生です。つまり、同じ大学で学ぶ多くの仲間が支援を行うわけですが、みんなが好き勝手にやれば混乱が生じるだけで、全く支援にはなりません。

例えば、聴覚障害学生につくノートテイクは、普通、一時間の授業に二人が必要です。誰がどの時間につくのか。全ての授業にノートテイクを配置するためには、また、各ノートテイクも自分の授業を持っているわけですから、それらを欠席することがないように、学業に影響のないようにするためには、どう配置すればいいのか。支援スタッフを適切に配置する、コーディネイトする、これがコーディネーターの業務です。

ただ実際には、コーディネーターは個別の支援を行える力量を持っており、例えば急にノートテイクの都合が悪くなった場合、その代わりをすることもあります。

ところで、ノートテイクなど、支援の多くは技術を必要とするものが多く、そのため、当然、支援スタッフの技量の違いというものも生じてきます。これを常に適正な水準に維持し、更にスキルアップを行うことも重要な業務の一つです。養成講座・スキルアップ講座の開催がそれです。そのための講師依頼、会場確保、広報も業務となります。